

## ★紹介コーナー No. 18

## 米軍住宅跡地のマンション街 パークシティ本牧けやき会「歴史カフェ」の取組み



管理棟にあるパークシティ本牧全体を示すジオラマ

これまで、いくつもの歴史サークル(郷土史研究・歴史散歩・古文書学習等)を取り上げてきましたが、その主体は退職後の高齢者(主に70歳代)が中心です。今回は自治会・老人会内での“歴史を学ぶ取組み”を取り上げました。

今年設立30周年を迎えたパークシティ本牧の老人会「けやき会」では4年前から「歴史カフェ」が行われ、その波及効果も種々あると伺いました。また、ここはかつて米軍住宅のあった地域であり、周辺には本牧の名所が多いことから、本牧の歴史にも焦点を当ててみたいと思います。(取材/文: 渡辺登志子)



管理棟は古い洋館、山手250番館。その説明書きより:「〈パークシティ本牧〉のクラブハウス(管理棟)の建物の原型は、1929(昭和4)年、山手250番地に建てられた、スタンダード石油会社社宅(アントニン・レーモンド設計)である。後に、横浜インターナショナル・スクールの施設として使用されていたが、1985年3月に取り壊された。」この設計者

は、山手のエリスマン邸でも知られている。なぜ、ここにあるのかの説明は見当たらない。



## 1. けやき会30周年記念講演「横浜・本牧30年の歴史」

2022年9月7日(水)、敷地内にある管理棟の本牧ホールにて、けやき会30周年記念の式典が行われた。会長の西村春樹氏の挨拶のなかで、「30年前の1992年の流行語大賞は『きんさん・ぎんさん』。当時100歳で元気、それも双子だから更に珍しかっただろう。だが今では、高齢者が急増し、100歳以上といっても以前ほど珍しくなくなった。これからの老人会の在り方も時代の変化にともない、隣接する本牧原地域ケアプラザなど外部組織とも連携していきながら、変わってい

30周年の祝辞を述べる西村会長

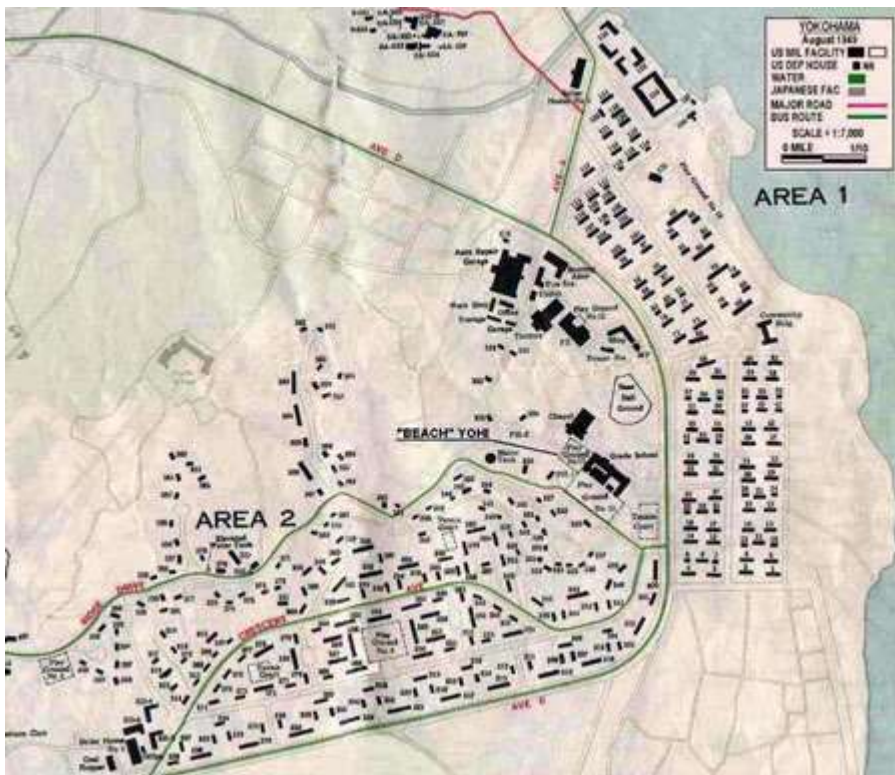
くだろう」との話があった。

「横浜・本牧 30 年の歴史」と題する記念講演は、本牧元町にある横浜市八聖殿（はっせいでん）郷土資料館の館長 相澤竜次氏を講師に迎えた。相澤氏は歴史カフェ当初から顧問をされている。

お話は終戦直後の接收がどのように行われ、その過程やその後どのようなことが起きたのか、接收地には複雑な地権問題があり、返還の際にはそのための解決案が複数あり、どのように交渉され、どのように開発が進められたのかを、他の接收地域の状況も含めて説明された。

面白かったのは、この本牧の米軍住宅地域は、当時、我々日本人にとって「フェンスの中のアメリカ」であり、広い敷地に広い間取りの家、美しい緑の芝生、セントラルヒーティングなどの贅沢なインフラ完備、多くの遊興施設・大型ショッピングセンターがあり、アメリカ人のその豊かな暮らしぶりに羨望の眼差しを向けたものだったが、当時の米軍新聞によると、実はアメリカ人にとっても、この海岸沿い約 8 万坪につくられた住宅や施設は景観にも配慮した将校・下士官クラスに提供される最良の接收地住宅であり、憧れの住宅施設だったとのことだ。

## 2. 新しい街づくり、けやき会と歴史カフェ



米軍住宅配置図。東側の海岸沿い一帯が Area1、市電道路の北側（山側）が Area2、現在の本牧神社（旧・十二天）がある。画像は市史資料室所蔵、八聖殿経由にて掲載。ここにはないが、根岸にあった米軍住宅は Area X だった。

### ◆「パークシティ本牧」

（中区本牧原）の敷地は、かつて米軍の家族住宅地 Area 1 であった。1982 年（昭和 57）日本政府に返還されたのち、本牧では「よこはま 21 世紀プラン」に沿った 21 世紀にふさわしい国際性ゆたかな緑あふれる住環境を創ろうとする官民一体の街づくりが進められ、1988 年竣工の「パークシティ本牧」はこの本牧をまさに象徴する街区となった。集会室、テニスコート、公園などがあり、住居棟 9 棟、総戸数 666 世帯の規模を

誇る。当初、入居者は地元の人が 1 割程度、そのほかはこの新しくできた街の良好な住環境を求めて、近隣各地からやって来たと考えられている。ほぼ同時期、すぐそばにマイカル本牧という映画館やホテルを備えた大型商業施設が完成した。横浜市営地下鉄が延伸され、ここを通るという話もあり、大いに活況を呈していた時期もあった。しかし、地下鉄延伸計画は立ち消えた。最

寄り駅（JR 根岸線の山手駅が根岸駅、みなとみらい線 元町・中華街駅）からは遠く、公共交通はバスのみによる。みなとみらい地区が盛況となるにつれ外からの客足が遠のき、2011年に映画館やホテルのあったマイカル本牧が消え、総合スーパーのイオン本牧になるなど、かつての華やかさはなくなったが、高齢社会とともに、整備され落ち着いた住環境と心地良いコミュニティが愛されて、依然として高い人気で、資産価値としても高水準を維持している。



本牧神社の鳥居の後ろ側にあったマイカル本牧の痕跡

◆「けやき会」（自治会の老人会）は、1992年9月、パークシティ本牧自治会参加のサークルの一つとして高齢者の社交、親睦を図ることを目的として設立された。当初はパークシティ本牧自治会全体の年齢層も若く、またバブル期に建設され入居者は富裕層も多く、老人会といっても、旅行などを主体に活発に活動していたようだ。

現在のけやき会会長の西村春樹氏は9代目で、2年前に会長職を引き継いだ。ここ数年の会員数は45名前後、平均年齢は70歳代後半で女性会員の方がやや多い。新しい会員を募ってはいるが、高齢であっても「まだ自分は高齢者（老人）ではない」と思っているのか、けやき会としては会員数がのびない。パークシティ本牧にどれほどの高齢者（60歳以上）がいるのかは、個人情報保護で明らかにされていないが、666戸の世帯数から考えるとかなりの数になるだろうから、まだまだ会員増加の余地はある。会費は月200円の半年払い、自治会や中区老人クラブ連合会からの補助金があるが、会費で賄えない場合は実費負担が原則。後述する歴史カフェへの参加費は無料で行っている。今日、コロナの影響も多いなかでも、けやき会としては、地味ながらも着実なあゆみを進めている。

#### ◆歴史同好会「歴史カフェ」立ち上げ

約5年前、現会長の西村氏が「けやき会」の役員の一人名になったころ、「コミュニティ・カフェ」という構想があった。せっかく集まるのなら目的を持って長続きするものを、と考え自分が好きで得意とする「歴史」を取り入れようと思いついた。当時、横浜の歴史の勉強会に参加していて、自分でテーマを考え、調べたことを発表したりしていた。八聖殿で毎月のように行われていた歴史講座・歴史散歩にもたびたび参加していたから、相澤館長とは顔なじみだった。ただ、西村氏は生まれも育ちも横浜ではなく、かつて両親がいたこのマンションに移り住んだのは2010年、退職後のことだったので、昔の横浜を肌で感じた経験がない。そこを補ってもらうためにも、横浜が地元でパークシティ在住の歴史仲間、橋田篤廣氏（現副会長）に声をかけ、歴史同好会を立ち上げることになった。ここでの歴史は、いわゆる教科書的な歴史ではなく、出来るだけ身近な自分との関係が見える歴史を目指した。けやき会からの承認も得られ、八聖殿郷土資料館館長相澤竜次氏を顧問として招聘、2018年6月2日、歴史カフェ発足講演会のチラシをパークシティ本牧の全戸に配布した。



パークシティ内にある「けやき通り」ここから「けやき会」という名称となった。

発足は2018年（平成30）年6月9日、発足の記念講演は相澤八聖殿郷土資料館館長による

「パークシティ本牧地域の変遷」であった。(その後の歴史カフェの各回の活動記録は下方に掲載)

2019年3月には、コロナウィルスの流行の影響もあり、けやき会副会長の橋田氏を中心とする「歴史ウォーク」を進めていく方針となった。

### 3. 「歴史カフェ」効果



歴史カフェ「外国人遊歩道を巡る」  
2022年4月 根岸森林公園にて

これまでの活動では、「子供たちが通う本牧小学校」、「中区消防署」「横浜市営交通」など、各施設の創立百周年記念に合わせて講演を依頼した。また、けやき会の新会員の入会を図るために、敷地内の植栽の管理をする「横浜植木株式会社」や、身近な「横浜銀行」、「横浜開港記念会館」等にも講演をお願いした。新会員の参加促進にはそれなりの効果があり、現在の役員の中には、歴史カフェに参加して、けやき会の存在を知り、入会し、さらに役員になった方もいる。役員の方々にはそれぞれの役割

分担があり、とても職務に熱心に取り組んでいる様子が伺い知れる。

けやき会・歴史カフェと、八聖殿郷土資料館と、本牧原地域ケアプラザの、この三者の相互協力が展開されるなか、八聖殿の相澤氏が他の地域ケアプラザ等の公共施設で、その地域に合った、またその時々タイムリーなテーマで講演するようになった。これには歴史カフェで培った経験の積み重ねが大いに活かされているにちがいない。地域ケアプラザ側などでは、有益な催し（歴史を踏まえたお話）が増えて喜ばれているという。



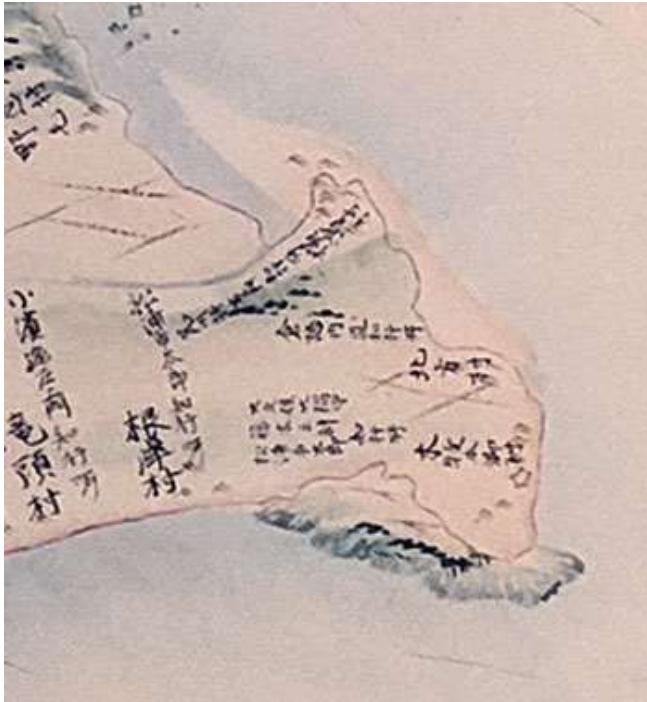
本牧十二天緑地。かつては海に突き出た崖の先端にあった十二天は、今は道路脇に、そこだけ木々に覆われたこんもりとした大きな岩の塊のような感じで残され、説明板が何枚も並んでいる。

### 4. かつての「本牧」という所

「本牧」という名称は複数の町名を含む周辺一帯をまとめた地域を指し、地図で見ると中区の下方、右下方向に海に出っ張ったところで、北は山手、西は根岸に接し、東・南は東京湾に面している。横向きの鼻の頭のように、「ペリーの落書き」で有名なかわら版には「本牧鼻」とあるが、よく言ったものだと思う。

#### ◆漁業で繁栄した大きな村、本牧

かつて突端部の本牧十二天（旧本牧神社）と本牧元町・本牧三之谷の付近は海岸から断崖が切り立っており、「本牧岬」あるいは「本牧の鼻」と呼ばれ、潮流が複雑に流れて豊かな漁場であった。そのため、農業には



江戸時代、伊能忠敬作成の地図の本牧付近を拡大。  
本牧本郷村と書いてあるようだ。上記の十二天の説明板  
から転載。原典は国立国会図書館所蔵。  
上方に横浜村の砂州が心もとなく伸びている。

不向きな土地ではあったが、漁業が盛んで、江戸幕府からの請負事業（煎海鼠〈いりこ〉生産）や廻船にも従事して繁栄した、非常に大きな村であったという。（編集者注：横浜村が約100戸、その数倍以上の規模）

開港後、外国人がやって来たことで本牧近辺には屠牛場が設営され、外国人遊歩道がつくられている。居留地に近く、変化に富んだ海があるゆえ、夏に海水浴、冬に狩猟と、本牧の地は馬や馬車でやってくる居留外国人のレジャーランドであった。

#### ◆本牧にあった「チャブ屋」（風俗店）

チャブ屋なるものは、その元となるものは幕末に遡る。外国人遊歩道沿道に、幕府が外国人のための休憩所を開店させたことがその始まりのようである。その後の変遷を経て、大正時代には各地に散らばっていた

ものを石川町の大丸谷と、（本牧の）小港地区に集めて営業させるようになった。当時のチャブ屋は、遊郭とは違い、ダンスができるバー、喫茶店、キャバレーのような所で、お客は船員を中心とした外国人だった。接客には素敵な女性が揃っていたようで、各地を航海する船員たちの口コミで、本牧はこのチャブ屋で世界に名をとどろかせていたという。その後、日本人も多く出入りするようになった。第2次大戦の戦災で本牧のチャブ屋は跡形もなく焼失した。戦後は米兵相手のド派手な女たちが闊歩するようになり、昔の品の良かったチャブ屋の女性たちを懐かしむ、戦後まもなくの新聞記事が面白い。

#### ◆今もある「三溪園」と「八聖殿」

かつて海に臨む風光明媚なこの一帯は別荘地で、有力な横浜商人たちが別荘を所有していた。原善三郎、小野光景なども広大な別荘を建て、政財界人・外国人などを招いていた。1905年（明治37年）原三溪により、複数の歴史ある建物・庭園を備えた三溪園の造成が完成。翌年、三溪園の約6万坪を公開した。1933年（昭和8年）安達謙蔵（元内務大臣）が本牧八王子山に精神修養の殿堂、八聖殿を設立。開殿式には時の首相（斎藤実）らも列席した。今では、両施設とも横浜市所有である。現在、三溪園南門から続く海よりの一帯（八聖殿も含む）は「本牧市民・臨海公園」として整備され、新たな憩いの場・観光名所になりつつある。

#### ◆かつてあった「横浜遊楽園」と「竜宮館」

この存在を知れば、今とは全く違う本牧の姿が想像できる。大正10年代に、二之谷の山の上に「横浜遊楽園」ができた。現在の立野高校の敷地のあたり。二之谷はすでに遠浅の海水浴場で知られ



横浜遊楽園  
須藤禎三氏の「昔の本牧」の表紙を拡大

ていた。横浜遊楽園は、数年後の市電が間門までの開通を見込んでの開園だった。海に面した山の上に飛行塔が建ち、それに乗れば、ぐるり四方が一目で見渡せた。その他、水族館、動物園、運動具なども揃った遊楽地だったが、惜しいことに開園まもなく、関東大震災で潰れてしまった。竜宮館は、その後昭和になって同じ場所で開園した海水浴場で、館内は当時流行ったレビューなどができる舞台や、水族館が設置されていた。当時の本牧の海と浜辺がキラキラと輝いていた様子が目に浮かぶようだ。

#### ◆埋立てで本牧から海が消えた



Google Earth で見る現在の本牧付近。  
江戸時代の地図と見比べると面白い。

戦後、高度経済成長を遂げるために、工業地帯を確保する必要から、昭和30年代後半から昭和50年代初頭にかけて、本牧から根岸、磯子、金沢まで横浜沿岸は埋め立てられた。それにより、かつては風光明媚な海と崖の風景、良好な漁場であり良質な海苔の養殖場、そして市民憩いの海水浴場であった本牧からは、かつての海が消え、産業用の海になった。海岸線は遥か彼方へ遠のき、埋立地には巨大な工場施設、石油タンクが立ち並んだ。その昔、海に突き出た崖の先端にあった十二天は、今は道路脇に、そこだけ木々に覆われたこんもりとした大きな岩の塊のような感じで残されている。

本格的な埋立ては戦後しばらくしてからのことだったが、埋立てそのものは明治時代にすでに始まっていた。貿易新報には、明治30年代に、その権利を激しく争う様子が報道されている。

参考文献：「本牧のあゆみ」1986年、本牧のあゆみ研究会。「『横浜貿易新報』に見る 昔の本牧 明治31年4月～昭和16年12月」、2005年、須藤禎三。「『神奈川新聞』に見る 昔の本牧 昭和21年から昭和59年まで」、2019年、丹羽和子。その他「Wikipedia」など。

本牧神社は、元々は東京湾につきだした高さ 30 メートルほどの本牧十二天の丘（現・本牧十二天緑地）の麓に所在していた。戦後アメリカ軍は横浜に進駐し、昭和 21 年から本牧十二天を含む本牧地区はアメリカ軍の住宅地区として接收された。昭和 29 年には、氏が結成した本牧神社復興奉讃会による寄付が行われ、本牧町へと仮遷座した。昭和 57 年、アメリカ軍から本牧地区が返還され、横浜市による区画整理事業が始まる。平成 5 年、所在地を本牧和田へと移し、社殿が完成した。（Wikipedia より）



## 5. これからのけやき会と歴史カフェ

一般的なサークルは気楽な仲間の集まりだから、突然亡くなる以外では、各人、体力・気力が衰えれば自然と足が遠のき、退会することになる。しかし、**地域の老人会は見守り・見取りの相互扶助的な役割も担っているため、最後までのお付き合いになることが多い。**そこが普通のサークル活動とは性質が違う。住民の高齢化にともない、けやき会自体は、近い将来には親睦を図るよりも見守りに比重が置かれるかもしれないと考えている。

一方で「歴史カフェ」は、とにかく継続することが一番大事と考えているのだが、引き継いでいける活動的な会員が増えないことには存続が危うい。そのためにも、コロナの収束とともに、**身近な歴史や地域を学ぶ機会を大いに増やし、その過程で解決策を模索していければ**と思っている。

取材者から：各地から集まった人々で新しく作られたマンションの街「パークシティ本牧」も 30 年以上経過すれば、もはや新しいとは言えないでしょう。そこは住む人々にとって郷土となり、そして歴史となっていきます。老人会内での「歴史カフェ」の存在は普通のサークル活動とは多少違う面もありますが、その継続は人々の結びつきと、郷土への愛情を育てる重要な役割を担っているにちががなく、老人会というコミュニティの新たな一面になるのかもしれませんが。継続と発展を祈念いたします。

### パークシティ本牧 けやき会 歴史カフェの記録

実施日	タイトル・内容	発表者
2018 年 6 月 9 日(水)	「歴史カフェ」発足講演会 「パークシティ本牧地域の変遷」	相澤竜次 八聖殿館長
7 月 4 日(水)	「パークシティ本牧地域の変遷（2）」	相澤竜次 八聖殿館長
9 月 5 日(水)	「マイカル本牧があった頃の思い出」	相澤竜次 八聖殿館長
10 月 3 日(水)	「本牧小学校の今昔」 本牧小の「学校要覧」	田中昌彦校長

10月21日(水)	本牧小学校見学と給食体験(課外講座) 給食費用は一人290円	
11月7日(水)	「マイカル本牧があった頃の思い出(2)」	相澤竜次 八聖殿館長
12月5日(水)	「山手警察の歴史と年末年始のご注意」	山手警察署村田警部補
<b>2019年</b>		横浜植木(株) 高木課長
2月6日(水)	「横浜植木(株)の歴史とパークシティ本牧の植物」	大柴麻衣子係長
3月6日(水)	「市電から市バスへの歴史とバスの安全な乗り方」	横浜市営交通浅間町営業所米山岳夫所長
4月3日(水)	「幕末から明治にかけての横浜居留地の歴史」	関東学院大学 小林照夫名誉教授
6月5日(水)	「160年前の外国人が見た日本の女性」	相澤竜次 八聖殿館長
7月3日(水)	「中区消防百年の歴史と災害救助の実際」	本牧和田消防所 安西隆雄所長
9月4日(水)	「横浜三塔(ジャック・キング・クィーン)めぐり」	横浜開港記念館 ガイド渡辺章氏
10月2日(水)	「横浜銀行百年と身の回りの金融を知る」	本牧・新本牧支店 斎藤正宏支店長
10月27日(日)	「磯子火力発電所の見学会(課外講座)」	
11月1日(金)	「横浜港内遊覧船とふ頭の見学(課外講座)」	
11月6日(水)	「山手警察のお話」	大後忠男巡查部長 高橋孝太郎巡查部長
12月4日(水)	「図書館の楽しみ方」	中図書館 島田和久館長
<b>2020年</b>		小柴俊雄氏 横浜演劇史研究家(パークシティ本牧)
2月5日(水)	「加藤和枝が美空ひばりになるまで」	
10月7日(水)	「生麦事件ツアー(番外編)」	橋田篤廣 けやき会副会長
11月4日(水)	「パークシティ本牧周辺ツアー」	橋田篤廣 けやき会副会長
<b>2021年</b>		橋田篤廣 けやき会副会長
4月7日(水)	「外国人遊歩道」を巡る歴史散歩	
7月7日(水)	「外国人遊歩道」を巡る歴史散歩	橋田篤廣 けやき会副会長
11月3日(水)	「横浜開港と神社仏閣の変遷」	橋田篤廣 けやき会副会長
12月1日(水)	「渋沢栄一と横浜本牧」	相澤竜次 八聖殿館長



2022年 4月6日(水)	根岸競馬場跡、馬の博物館ほか歴史散歩	橋田篤廣 けやき会副 会長
6月1日(水)	「横浜とシルク貿易」	松村(株) 松村俊幸社長
7月6日(水)	「私の好きな本牧通り」	本牧リボンファンストリート 商店会 羽生田靖博会長
9月7日(水)	「横浜・本牧30年の歴史」	相澤竜次 八聖殿館長

以上

ここからはサイト上では右欄に掲載された部分

## 本牧の郷土関係誌紹介コーナー

### 「昔の本牧」—本牧を愛する人がつくった冊子

図書館に行ってみると、郷土本牧を愛する人たちによってつくられた「本牧」についての本・冊子が何冊かあります。そのなかで、本牧を取り扱った昔の新聞記事だけを抜粋してまとめた冊子が目にとまりました。とりわけ、作成者がなぜそんなことをしたのか、が書かれている「まえがき」がとても本牧愛に溢れ楽しいのです。もちろん記事自体も非常に興味深く、昔の新聞記事は、現在の淡々と事実だけを伝える表現のしかたとはかなり違って、喧嘩腰でセンセーショナル、過激な言葉遣いも多く、情報が新聞しかなかった時代、その影響はどれほどのものだったのか、想像が付きません。

以下、その「昔の本牧」と題する冊子の紹介をいたします。2冊ありますが、1冊目が須藤禎三氏によるもの、2冊目が丹羽和子氏によるものです。彼らが本牧の地元の人であることは分かりますが、それ以外の情報は書かれていません。丹羽氏は須藤氏のやり残された部分を引き継がれたとのこと。両冊子のまえがきは全文掲載させていただき、内容については、ごく簡単に掲載記事の件数など数えたものなど、感想を含めて記載します。(編集・文 渡辺登志子)



### 『横浜貿易新報』に見る 昔の本牧

明治31年4月～昭和16年12月

#### まえがき

気が向くと、時折り県立図書館の神奈川資料室へ足を運び、『横浜貿易新報』（現『神奈川新聞』の前身）の複写版を一頁ずつパラパラとめくって、本牧関係の記事を見つけると、コピーしては家に持ち帰り、それをパソコンに打ち込んで集録したのが、この小冊子です。

なぜそんな物好きなことを始めたのか。それには一つの動機がありました。

(装丁はB5サイズ、縦書き2段)  
(文中に掲載頁がカッコ内にあるが、ここには掲載していない。原本は図書館で参照ください)

昔は、間門小学校のすぐ下が海岸でした。その海岸へ通じる細い道を歩いてゆくと、右側に「横浜遊楽園」という遊園地があり

ました。つまり、海へ向かって、細い道の右側が遊樂園、左側が間門小学校という構図です。この遊園地は、かなりの規模のもので、山頂には飛行塔が聳え、山頂から麓へと大山すべり台があり、山麓には動物園、遊具広場、海辺には水族館、海水浴場（竜宮館）などの設備がありました。

太平洋戦争によって、本牧一帯が米軍の占領地になるまで、私は本牧町字配郷（現在、都市公団ベイサイトⅢ・OKストアのある辺り）に住んでおりましたので、子供の頃は、夏になると毎日のように二の谷海岸へ泳ぎに行ったものでした。現在間門小学校の水族館がある辺りまで行くと、道の右側に遊樂園の入口（入場券売場）があって、そこから海岸まで、鉄製で先端が槍の形をした遊樂園のフェンスが続いておりました。

ところが、その槍のようなフェンスのうちの1本の先端が、前へ折れ曲がって錆びているのです。なんでも、父親の話では、電柱に登って工事をしていた人が、感電して墜落し、その槍に突き刺さって死んだのだということでした。その話を聞いてからというもの、幼い私は、怖くて怖くて、その曲がったフェンスの前を通るたびに、いつも目を瞑ったまま一目散にそこを駆け抜けたものでした。

それから六十何年かの歳月が経ちました。

昭和57年に米軍の占領が解除になり、本牧の新しいまちづくりが始まりましたが、当時そのまちづくりの関連で発行していたタウン誌『さきがけ』に、横浜遊樂園のことを執筆しようと思って、大正末期の『横浜貿易新報』を調べていたら、「高圧線に触れ大工無惨な死」（174頁）の記事が私の目に飛び込んできました。「あっ、これだ!」。その瞬間、私の目は忽ちその記事に焼き付けられてしまいました。疾（と）うの昔に忘れ去っていた、あの恐ろしい「錆びて曲がったフェンス」の記憶が、鮮明に脳裏に甦ったのです。そんなことから、「昔の新聞を読むことで、もしかすると、私の幼い頃の記憶が裏打ちされるかもしれない」。ちょっと大げさな言い方をすれば、「私の生きた時代を新聞で辿ってみよう」と思い付いたのです。そして、どうせ読むなら、横浜電気鉄道株式会社の路面電車（後の横浜市電）が、元町の西の橋から本牧の原まで延長になった明治44年頃の記事「本牧線の試乗」（105頁）から読み始めようと思い立ちました。その頃が「本牧の夜明け」と言われる時代だからです。

私は大正9年（1920年）の生まれですが、関東大震災（大正12年）の恐怖の記憶が全くありません。ところが、その翌年の市電の「間門線延長」（153頁）の記事を読んでもみると、間門の山一帯に紅白の幕が張りめぐらされ、その中でお酒好きだった父親が赤い顔をして誰かと談笑していた園遊会の風景を、私は思い出すことができたのです。父親に連れられて新しく開通した電車に試乗し、園遊会に行った記憶。私の記憶は4才から始まっていることが分かりました。

遊樂園の山（現在、立野高校のある山）の上から見た見事な仕掛け花火（159頁）、遊樂園の飛行塔や動物園（148頁）、竜宮館の開館（176頁）、鯨の見せ物小屋の物すごく臭かったこと（184頁）、父に連れて行ってもらった山手トンネル開通式（191頁）、矢の田（当時こう呼んでいた。矢は字名）の化け物騒ぎ（193頁）、先生に引率され、本牧小学校から歩いて転校した間門小学校の開校式の日（206頁）。幼い記憶を辿るのが面白くて、いつの間にか昭和16年12月まで読んでしまいました。

「せっかくここまで読んだので、ついでだからもつと古い時代にも遡ってみよう」と思い立ち、今度

は、県立図書館に現存している中で最も古い、明治31年4月1日の記事から読み始めました。そして、ようやく前記明治44年の「本牧線試乗」にまで辿り着きました。図書館の整理番号でいうと、明治31年4月が第1号で、昭和16年12月が992号なので、1000冊近い複写本に目を通したことになりますが、恐らく読み落としもまだまだたくさんあるかと思えます。

—中略—（転載にあたっての文字変換などの記述）

なお、特に難解な言葉や、状況説明が必要と思われる個所には、★印を付けて注釈を加えました。

この冊子が、どなたか「本牧が好きな人」の目にとまり、もし、何かのお役に立つことができれば、それこそ望外の喜びというものです。

★ 表題が『横浜貿易新報』となっていますが、正確には同紙の題字は次のように変遷しています。

明治23年2月1日～明治37年6月19日	横浜貿易新聞
明治37年6月20日～明治37年6月30日	横浜新報
明治37年7月1日～明治39年12月2日	貿易新報
明治39年12月3日～昭和15年12月12日	横浜貿易新報
昭和15年12月13日以降	神奈川県新聞

なお、現在の『神奈川県新聞』に改題されたのは、昭和17年1月1日からです。

2005年2月

横浜市中区本牧和田（編集者により番地略）

須藤禎三

（編集者）数えてみると、明治31（1898）年4月～昭和16（1941）年12月までの43年間で、535の記事が掲載されている。

ここに掲載された始まりのあたり（明治31.2.3から1年間以上）は、成功して政財界に君臨した横浜商人の代表的存在、原善三郎氏の逝去にとまなう、氏の履歴、葬儀、伝記などである。それに続くのが「本牧海岸埋立て事件の大悶着」（明治32.10.17）で始まる埋立ての権利を誰が手にするかの大波乱が、他の記事を挟みながらも明治37年まで続いている。その中で原富太郎を非難する記事がかなりあり、「原富新報の暴慢」（明治36.10.11）などと攻撃していたのに、明治37年6月19日に「横浜貿易新聞と横浜新報の合併」が報じられている。そのことに関して須藤氏が以下のような注釈をつけている。

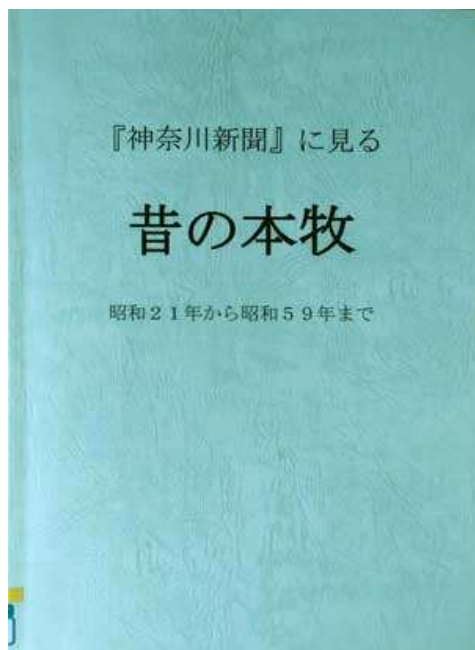
★ 明治37年6月19日

『横浜貿易新聞』と『横浜新報』の合併

前年の総選挙以来あれほどまで激しく対立していた『横浜貿易新聞』と『横浜新報』の両社が突如合併することになり、明治37年6月19日の紙上（第4354号）に、「横浜貿易新聞と横浜新報の合併」の社告が掲載された。

紙名は『貿易新報』と改題されたが条例等の手続き上、6月30日までは、『横浜新報』（第1105号）の題字とし、7月1日から『貿易新報』（第1116号）の新しい題字に改められた。

(編集者) 何があったのかは全く分からないが、その後は、原三溪である富太郎氏と三溪園を讚える記事が多く見られる。その他、人と言えば、本牧の名士、小野光景氏関係の記事が見られる。明治 44 年 12 月に開通した横浜電気鉄道 (旧、市電) 関連の記事も多い。



(装丁は A4 サイズ、横書き)

## 『神奈川新聞』に見る 昔の本牧 昭和 21 年から昭和 59 年まで

まえがき

この冊子は昭和 21 年 (1946 年) から昭和 59 年 (1994 年) までの 38 年間における本牧関係の新聞記事 (神奈川新聞) を収録したものです。その間、昭和 57 年には米海軍へ接收されていた土地が返還され、そこには返還された土地には「国際性豊かな街づくり」のもと、「建築協定」「景観協定」「管理規程」などを地権者間で締結し、より良い街づくりが行われ、本牧全体が住みよい街 (交通面は未だ地下鉄も通らずバス路線のみ) になったと思います。

既に、私の前後の年については横浜質易新報や神奈川新聞等から収録したものが、須藤禎三氏により発刊されています。

須藤氏の未収録の部分埋めを依頼されましたが、週 1 回の市の図書館通いではなかなか進みませんでした。マイクロフィルムも年を追ってページ数が多くなり、当初は 1 回で 1 年を見られましたが、半分が過ぎた頃には 1 回で 5 ヶ月分とスローペースになり、約 5 年の歳月がかかってしまいました。

また、須藤氏発刊の B5 サイズ、縦書きに揃える約束が、A4 の装丁、横書きで発刊することにいたしました。

また、お引き受けして半年後に亡くなった、本牧の生き字引として尊敬していた須藤さんに「やっと出来ました」と墓前にご報告をしたいと思います。ご協力いただいた皆様には深く感謝いたします。

平成もあとひと月で新しい元号に変わる節目に発刊できたことは、大変うれしい限りです。

平成 31 年 3 月 吉日

丹羽和子

### 【著作権保護について】

この書籍の作成にあたっては、神奈川新聞社からのご指導のもと、著作権保護期間が終了した昭和 42 年以前につきましては記事全文を、また著作権保護期間中である昭和 43 年以降につきましては、どの

ような記事が書かれていたか、日付と項目のみご紹介の2部構成とさせていただきました。

---

(編集者) この冊子の集録は、著作権が切れている昭和22年～昭和42年までが291件、当時著作権があった昭和49年から59年までが314件で、合計38年間で605件となっている。

後半の著作権のある314件のなかで、繰り返し報じられている記事の代表的なもの3つを時系列で示している。それによると、1. 米軍海浜住宅の返還に関する記事、2. 本牧の埋立地と本牧ふ頭に関する記事、3. 三溪園に関する記事となっている。編集者が数えてみると、1. 67件(21%)、2. 121件(39%)、3. 44件(14%)であった。埋立て・本牧ふ頭関係が圧倒的に多いのは、その後の「本牧ふ頭」に関する事、港湾施設(コンテナ、ガントリークレーン、港湾関係者の住宅など)、港湾業務、工場地帯の企業、本牧市民公園など多岐にわたった事象が含まれているからと思われる。

---

(編集者) 1冊目の須藤氏は神奈川県立図書館の利用、2冊目の丹羽氏は横浜市中心図書館を利用しているようです。想像するに、市の図書館の機能が充実して利用しやすくなったのではないかと思います。

こうした本牧を愛する人々によって残された記録は、今すぐに必要とされなくとも、後の世代にとって役立つものになるかもしれません。郷土研究は地味ではあるが、それに携わる者には言い知れぬ喜びを与えるようです。そして、そうしてつくられた調査研究資料は、いつか誰かの役に立つために、図書館の書架・書庫で、ひっそりと待っているように思えるのです。

なお、ネット検索していたところ、タウンニュース中区・西区版(2019年6月13日号)に「本牧三之谷丹羽さん 篤志家の思い継ぎ本出版 戦後の地元記事、一冊に」を見つけました。下記からご覧ください。

<https://www.townnews.co.jp/0113/2019/06/13/484910.html>